

博士學位論文要約

論文題目： 「いけばな療法」の信頼性の検証と普及のための実証的研究

氏名： 浜崎 英子

要約：

1. 本論文の背景と研究の目的

人が花を愛でる、飾るという行為は、枕草子に多くの花や植物の描写があることや、万葉集に、花に自分や他者の気持ちを例えて詠んだ歌が多くあることから、古くから花の様子を通して、人は、思考や感情の整理に役立てていたと言えるであろう。また、桜の季節や、紅葉の時期になると、美しい景色を鑑賞しに人々が多く集まることから花や植物の様子は人々や社会に大きな影響を与えている。

日本には、花を活用した華道文化が室町時代より、社会の変化に適応しながら、継承発展されてきた。その歴史をふりかえると、華道から人はこれまで多くの生きるためのヒントを得てきている。何百年にもわたって継承される、伝統的なものが、本質を大事にして、実は変化を繰り返してきた様子というのは、私たちの社会を持続させていくヒントにもなるのではなかろうか。しかし、華道文化や花が人々の心理や行動、社会づくりにどのように影響するのかについて横断的で網羅的な研究は、これまでにほとんどされていない。

筆者は華道家、公認心理師としていけばなを通して子どもから高齢者まで障がいの有無にかかわらず、あらゆる世代の人々と関わり、それぞれの人々が自分らしさを取りもどし、人生に生きがいを感じ心がしなやかになる様子、そしてその周りの人々に気づきを与えられる機会に多く出会ってきた。

本研究は、華道をベースにした「いけばな療法」の考案から始まったソーシャル・イノベーションの一例を示し、その概念の革新性とアイデアの信頼性を検証し、その普及により創出される社会的インパクトを明らかにした。

研究の目的は、次の4つのことを明らかにすることとしている。

一つ目に、華道の精神性をベースにし、いけばなの制作プロセスや作品を、人々の心のケアや非薬物療法として役に立つ「いけばな療法」として開発し実践できること。

二つ目は、その実践は、疫学的にも社会科学的にも信頼され、有効であると証明すること。

三つ目として、「いけばな療法」を確立し普及することにより、さまざまな人を巻き込んで、社会変革を起こすこと。

四つ目は、その社会変革をモデル化してそのモデルが実際に効果的であること。

これらの目的に沿って研究仮説を構築し、実証のための社会実験を企画・実施し、その成果を分析して仮説検証の結果を明らかにする。

社会実験の考案については、計画段階では、対象とする分野の課題分析、アイデアの理論的枠組みをまず明らかにして実験を企画した。実証段階では、外部協力者参加のもと、実験室的

な環境における検証実験と、継続的に実施できる実社会の現場での実装実験を組み合わせで行った。

社会実験は大きく分けて、次の4つに分類している。

- ① 社会実験 1 により「いけばな療法」による個人の変容に関する検証を行う。
- ② 社会実験 2 により「いけばな療法」の専門職による評価と課題、成果の検証を行う。
- ③ 社会実験 3 により「いけばな療法」の普及方法の検証を行う。
- ④ 社会実験 4 により「いけばな療法」の制度化、体系化の検討を行う。

①、②の実験により「いけばな療法」の信頼性を検証し、③の実験により普及のプロセスを分析し、④により「いけばな療法」によるソーシャル・イノベーションに向けたシステムの構築を検討することとした。

2. 本論文の構成、研究対象、方法

本稿は、第1章から第14章で構成している。第1章は、研究の背景、目的、対象、方法、研究の枠組みを示す序論の位置づけとした。

ソーシャル・イノベーションにより創出される、社会的インパクト評価は、「事業のニーズ、事業のセオリー、事業のプロセス、事業のインパクト、事業の費用対効果」により評価される。そのことから、事業のニーズについては、第2～4章で華道や認知症ケアなど対象分野の現状分析を、事業のセオリーについては第2～4章において華道精神、心理療法や認知症ケアの理論を検討して、「いけばな療法」の方法論考案の根拠を明らかにした。

第2章では、華道界においては、入門者数の減少、特に若い世代の入門が激減していること、それに対する解決策は、斯界を横断する研究や実践、組織の必要性、華道の精神性に基づく新しい視点が必要だとされていることを明らかにした。さらに先行研究や華道家元の思想、インタビューから華道の精神性について定義し、「いけばな療法」はその精神性に基づき展開されていることを示した。その精神性とは、美しさをある一方向から観た完全な形と捉えるのではなく、不完全な形であっても美しいと思う心を育み、植物の様子から人や社会のより良いあり方を知ろうとする姿勢のことだと捉えられたとした。これは、福祉理念であるノーマライゼーション、エンパワーメント、ソーシャル・インクルージョンの概念、対人援助論の基本姿勢と共通することも示した。

第3章では、「いけばな療法」のアイデアは、一定のエビデンスが明らかにされている心理療法の統合的アプローチであること、非薬物療法の標的分野である認知面、感情面、行動面、心理面に作用する構成がされていること、いけばなの制作プロセスは、記憶の分類と関連が深いことを明らかにした。また、心理療法家の態度条件といけばなプロセスで花と向き合うときの態度の共通点、いけばなの工程や表現が芸術療法の効果を引き出す点、いけばなで、花を見立てる際には、知覚が関連し、それを療法的に活用する方法を示した。

第4章では、認知症ケアの今後の方向性に関する先行研究や先行事例から示唆を得て、「いけばな療法」の展開の方向性を示した。認知症ケアの分野では、認知症の治療では、周辺症状(BPSD)への治療に対しては非薬物療法が優先されること、非薬物療法のエビデンスは医学的なエビデンスを求めつつ、当事者や周囲の人のQOLを高める方法であることが重要視されることが示された。そして、認知症ケアにおいては、認知症の人の社会参

加できる仕組みやプログラムが必要とされ、認知症の人のみならず、家族や介護者もケアの対象とすることを確認した。つまり、「いけばな療法」の展開の方向性は、認知症の人が「いけばな療法」を通じて社会から排除されることなく、その人らしく参加していくことを目指し、花だからこそ、いけばなだからこそ有効である点を活かして、本人が直接的な関りだけでなく、間接的であっても社会参加している自覚を持てる方法となる必要があるとした。

3. 「いけばな療法」社会実験の仮説

第5章では、「いけばな療法」により創出したい社会に至るために、ソーシャル・イノベーションに必要とされるものについて先行研究を参考にして以下の問いを立て、「いけばな療法」によるソーシャル・イノベーションの理論仮説を構築した。

- ①対象分野、対象者に社会課題があり、課題解決を必要としているのか
- ②根拠のある課題解決の方法となっているのか
- ③実施したことにより対象となる個人、組織、相互作用に影響があるのか（対象は、実施者、実施団体の自己も含むとする）
- ④実施するプロセスにおいて、多様な関係者の参加、連携、協働が構築されるのか
- ⑤実施の成果やプログラムは、第三者に信頼され評価されるのか
- ⑥事業に関連する制度化や体系化を行えるのか
- ⑦ビジネスモデルの構築を目指せるのか

これらの問いに対して、「いけばな療法」においては、次のようなプロセスの仮説が成り立ち、ソーシャル・イノベーションが創出できると考えた。

第一に①②に関しては、「いけばな療法」は、従来の心理療法の要素を含み、非薬物療法の標的分類項目や、記憶を司る脳の領域にアプローチできるとしていることから、対象者個人が抱える課題に対して、有効に作用すること。認知症高齢者を対象に「いけばな療法」を非薬物療法として実践することで、認知症の症状が緩和され、その周囲の人にとっても療法的効果やケアに対する気づきや成長があること。

第二に②③に関しては、第一の作用があるのであれば、従来の非薬物療法の普及過程と同じように認知症ケアに関係する専門職から「いけばな療法」は受け入れられ、信頼を得て、理解者が広がること。そして、現場で取り入れられるために、その方法論をわかりやすく伝えることで、専門職が実践できるモデルが構築できること。

第三に④⑤に関しては、ソーシャル・イノベーションの普及には、多様な人の参加と協働が効果的だと言われていることから、一定の信頼が得られたと判断した時点において、「いけばな療法」を普及・拡大するために、多様な人々の参加や、協働、連携につながる仕掛けを実践することで、「いけばな療法」の新たな理解者が増え、ネットワークが拡大し、普及していくこと。さらに、参加したそれぞれの人には、その人の状態に応じた心理的、発達の成長が見られること。

そして、第四に⑥⑦に関しては、「いけばな療法」を軸とした、多種多様なセクターや世代の直接的、間接的な参加による協働の仕組みにより、普及・拡大が進むことで、新しいシステムとなり、社会全体を変動させ、事業開始時と実施後には、新たなネットワークと取り巻く環境

に変化が起きていること。そして、その担い手となる個人や組織自体にも個人や社会の変化が刺激となり、成長が見られ、外部との関係にも相互作用が起き、制度化や体系化の準備も整い、良い循環が起きること。

4. 認知症ケアに関する社会実験の実施と検証

これらの仮説の検証のために、「いけばな療法」によるソーシャル・イノベーションは可能であり広く浸透するののかについて、本研究では四つの社会実験を行い、その目的、方法、結果、考察を以下の各章で整理した。

第6章では、「いけばな療法」を認知症高齢者に実施し、その効果検証、介護施設職員と認知症高齢者の家族への影響を分析した。認知症高齢者への効果は、自己表現能力の向上、五感の刺激、BPSDの変化、記憶の喚起に作用することがわかった。施設職員については、ストレス度合いや「いけばな療法」についての意識に変化があった。さらに、「いけばな療法」は、介護者と認知症高齢者の調整役となり、相互理解に役立ち、人と人との関わりを深めることも明らかとなった。非薬物療法の効果とされている認知症のBPSDの中でも、これまであまり効果が確認されていなかった、易怒性や攻撃性にも効果的に作用することも明らかとなった。

第7章では、「いけばな療法」について認知症ケアの専門職に向けたアンケート調査を実施した。また、専門職への研修を行い、実践できるモデルとなるかを検証した。その結果、「いけばな療法」は専門職に認知症ケアとして一定の信頼を得た療法となっていることを確認した。専門職が研修を受け、施設内で実践した場合も、「いけばな療法士」が実施する場合とある程度の効果は一致した。そして、研修を受け、実践をすることで、これまで関わりがなかった華道やいけばなの本質を理解し、関心を持つこともわかった。

第8章、第9章、第10章では、「いけばな療法」の拡大・普及の段階として、さまざまな人を巻き込む仕掛けを備えた「いけばな街道」の開催を社会実験として行った内容とその成果を考察した。

社会実験の目的は、以下の四つとした。

- (1) 認知症の人たちのように、外出が困難な状況の人であっても、いけばな作品を通して社会参加できることを本人や周囲の人も自覚し、そのことによって心理面、行動面の変化があり、療法的効果を高めること。
- (2) 「いけばな療法」の作品は、まちづくりの活動、協働のプロセスで効果的に作用すること。
- (3) いけばな療法参加者の作品やいけばな療法を通して、多くの人が、認知症者や社会的弱者について正しい理解のもとに意識するようになること。
- (4) いけばな療法参加者の作品やいけばな療法を通して、福祉、医療、教育、ビジネスなどの多岐にわたる分野でも影響が広がり、新たな価値創出につながること。

これらを目的に実験を行ったところ、参加した個人には、次のような効果が見られた。認知症の人に対しては、周辺症状に影響を及ぼす心理的な安定と認知機能への良好な影響が見られ、不登校の子は、自分自身の能力の発見により自己効力感を感じることができ、ひきこもり状態の人は、社会に対して興味を持つことや、知りたい気持ちが芽生えた。ま

た、「いけばな街道」を開催する側であった人々にも変化が見られ、活動に対して、次第に内発的な動機づけから参加するようになった。また、参加したそれぞれの人の中で、認知症者や社会的弱者の正しい理解が深まっていった。

これらのことから、社会実験の第一の目的であった「いけばな街道」は非薬物療法の効果を促進する役割を担い、さらに、第三の目的であった社会課題への理解の促進の役割も担ったことがわかった。

また、第二、第四の目的とした点についても次のような様子が確認できた。「いけばな街道」の開催により、公共部門・民間営利部門・民間非営利部門の境界を超えて協働や連携は広がりを見せ、参加した個人のみならず、組織の成長や相互関係の変化も観察された。2020年の感染症拡大時のオンラインを融合させた「いけばな街道 2020」の方法論においても同様の成果は見られた。

さらには、「いけばな療法」においては、協働の要素として、活動自体を協働で進めることと、作品を協力し合い作り上げる点の二つの側面があることも効果的に作用することも明らかとなり、伝統文化であるいけばなの社会的な価値を協働による新たな側面で見出せる結果となった。

このような結果から、「いけばな街道」は、「いけばな療法」によるソーシャル・イノベーションのプロセスにおいて普及や拡大、つまりスケールアップの役割を果たしたことが明らかとなった。

そして、成果に導いた重要な点として、活動への参加のしやすさが関わっていることも明らかにした。参加のしやすさは、人々の状態により異なるため、様々な段階で参加できる仕組みがソーシャル・イノベーションに向けた普及・拡大の段階で有効な可能性も示した。

第11章では、「いけばな療法」の信頼性を高め、さらに普及することを目指し、制度化、システム化を実現するために設立した、日本いけばな療法学会の役割を示した。

日本いけばな療法学会は、華道界の課題解決策として求められている、斯界を横断する組織や研究の推進に役立つ機能をもつこと、いけばな療法士を養成し、資格認定を行い、「いけばな療法」の普遍的な質の担保やその効果、制度を客観的かつ公平に評価、判断する役割を担っていることを確認した。そして、「いけばな療法」は個人が抱える問題を対象とする療法にとどまらず、組織、社会が抱える課題についても対象とし、いけばなによる社会の療法でもあることを明示していることで、これまで華道界と直接的に関わりがなかった人との関係が日本いけばな療法学会を介して生まれることも示した。

5. 検証結果の考察

第12章では、ソーシャル・イノベーションとしての成果を総合考察した。

第5章でソーシャル・イノベーションへの仮説として提示した第一の仮説の個人への変化は、認知症の人や、その周囲の人への効果を既存の信頼性のある尺度や理論に基づく尺度を作成して、介入の効果検証を行い、一定の有効性が確認できたことで、仮説は支持されたことを明らかにした。

そして、第二の仮説である認知症ケアの専門職や施設現場などでの需要の広がり様子

は、その成果を専門職が集まる国内外の学術研究発表の場で発信することで、専門職から「いけばな療法」は評価される結果を得られ、その発信が作用して、専門職への「いけばな療法」の研修というモデル構築をすることにつながり、普及の道筋を構築することができたことを示した。さらに、研修の効果は、方法論を理解することと同時に、華道の本質の理解や「いけばな療法」の目指すビジョンを知る機会にもなり、さらなる波及効果が生まれ、読売福祉文化賞の受賞や企業での研修の取入れなど、第三者に「いけばな療法」は価値あるものとして評価されることになったことを確認した。

第三の仮説の、「いけばな療法」を普及・拡大するために、多様な人々の参加や、協働、連携につながる仕掛けを実践することで、「いけばな療法」の新たな理解者が増え、ネットワークが拡大し、普及していくこと。第四の仮説の、ネットワークの広がりにより「いけばな療法」を取り巻く環境に変化がおきること。これらについては、「いけばな街道」の社会実験の成果において、ネットワークの広がり確認ができたことから、仮説に基づく成長を「いけばな療法」は遂げていることを確認した。

さらに、事業開始当初と比較すると、普及・拡大するに従って、担い手である、「いけばな療法」の組織の様子も成長段階に達し、組織内の個人の成長にも影響を及ぼしたことも明らかとなった。そのような成長に導いたのは、「いけばな街道」の開催が、効果的に個人、組織に作用し、さらなる拡大のステップにつなげられる段階となったことが影響したことも確認できた。これは、ソーシャル・イノベーションの先行事例でも多く見られる人々の潜在力が高まり、組織の持つ力を拡大させ、良い循環が起き、普及・拡大していくプロセスと一致した。

加えて、ソーシャル・イノベーションを進めるとき、その担い手となる個人や組織の内部、外部へ向けたコミュニケーション力は重要な要素であることも示した。

第13章では、「いけばな療法」の更なる普及や拡大に向けた今後の展開においては、ビジネスモデルを構築し、資金の流れを作り、市場の力を活用するシステムをつくること、そして、そのシステムの中でハブとなるものは日本いけばな療法学会であり、そのハブの機能を充実させていかなければならないことを明らかにした。

日本いけばな療法学会がハブとなる理由として、ソーシャル・イノベーションのモデルを見本として展開されているプログラムが正しく機能するのか、元のモデルとの論理的な整合性の検証、元のモデル自体も新たな課題への適応に向けた改良をする機会やそれを受け入れる体制がなければ、モデルを構築しても、瑕疵を見逃し、その質の担保ができなくなることをあげた。

また、解決すべく動いている対象が、社会課題である場合、そこに必要な事業資金は、その対象者、利用者から得られない場合もあることから、ビジネスモデルを構築し、資金の流れを作るシステムの構築、協力的な資金提供者の確保や財務的な持続可能性についても「いけばな療法」の今後の実践上の方向性と課題であるとした。

そのためのアイデアとしては、第一に、日本いけばな療法学会での資格認定事業や研究発表の場、研修事業により、プログラムの適正さを確認していくとともに、そこでの収益の一部を、助成金や補助金といった公平な形で審査し配分する制度を構築することによって、「いけばな療法」や「いけばな街道」モデル事業に取り組む組織に還元するといった仕

組みを構築することとした。

第二に、一定のエビデンスの構築がされている心理療法や非薬物療法を提供する非薬物療法総合クリニックの機能を持つ、サロンをビジネスとして展開すること。そして、ここでは、花屋、カフェ、教室など収益事業を展開することで、その費用の一部を子ども食堂、不登校支援といった社会事業に回す仕組みが構築できることを示した。これにより、助成金、補助金に頼りがちな社会事業の資金面での課題を支えることができることとした。

そして、この仕組みを見ると、多様な人々の参加の様子が見てとれ、認知症の人、不登校の子どもたち、ひきこもりの人など社会とつながりにくい状況の人が、この仕組みの中で働くことや、役割をもつことができるようになってきていることも示した。

6. 本研究の成果と課題

第14章では、本研究の到達点、今後の研究課題を示した。

まず、「いけばな療法」は、華道の精神性をベースにし、いけばなの制作プロセスや作品を、心理学の知見に基づき整理し、人々の心のケアや非薬物療法として役立つように開発し実践していることを示したことで、華道文化の新たな視点での研究成果となったことを示した。

そして、「いけばな療法」の効果として、これまでに非薬物療法の効果として、確認がなかった BPSD の易怒性や攻撃性に対する影響を示せたことは意義があった。さらにこの特徴とともに、「いけばな療法」は対象者と周囲の人との調整役として機能し、良好な人間関係の構築、人々のコミュニケーションを促進させるものとして作用することも示すことができた。

「いけばな療法」によるソーシャル・イノベーションは、先行事例より分析された社会的インパクト創出に必要な要素や段階を含み、「いけばな療法」やその作品、そして「いけばな療法士」の資質が相互作用的に効果を及ぼし事業展開に貢献したことがわかり、ソーシャル・イノベーションへの仮説と一致することを確認した。

対象とする社会に、課題やニーズがあること、それに応える根拠のあるアイデアであることは、人々の信頼感を得ることができる条件である。またそれを伝えること、すなわち運用する担い手の社会へのコミュニケーションが、普及する段階では重要なこととする知見とも一致した。

さらには、「いけばな療法」においては、協働の要素が、活動自体を協働で進めることと、作品を協力し合い作り上げる点の二つの側面があることも効果的に作用することも明らかとなったことは、伝統文化である華道の社会的な価値を協働による新たな活動領域の開拓により新たな価値創造が可能となる結果となった。

今後の展開において、ソーシャル・イノベーションとしての特質を発揮できるようにするための方向を検討することもできた。アイデアや実現の方法そしてその評価が不確実なものであると、普及や拡大が一時的なもので終わってしまう。そのため、アイデアを始めとする質の担保は重要で、そのためにもモデルの構築だけではなく、そのモデルを検証する機能を兼ね備えたシステムを構築することも明示し、ソーシャル・イノベーションを目指すための実践方法を分析し提案することができた。

これらの展開可能性は、華道という伝統的な文化を活用したソーシャル・イノベーションの

一例を示したことに留まらず、他の生活文化領域においても応用展開ができるものであり、それぞれの文化振興にとっても貢献できる可能性を示した。

これらのことから、本研究のまとめとして、「いけばな療法」が解決を目指す社会的な課題やニーズの分析の正確性、根拠と信頼性あるいは確実性のあるアイデアである適切性、そして普及過程で協働や連携につながる、参加型の仕かけの重要性とその作用により普及・拡大に結び付く拡張性を確認することができた。このように検証できたことによって、「いけばな療法」によるソーシャル・イノベーションを実証する本研究の目的は達成できたと結論付けた。

今後の研究課題には、「いけばな街道」が社会的な意義がある活動であり、「いけばな療法」を普及する役割を担ったことを本研究において指摘したが、非薬物療法としての展開方法であり、「いけばな療法」の社会参加モデルとしての「いけばな街道」を主張するとすれば、「いけばな街道」の開催の医学的な効果や社会経済的な有益性について、詳細に検討しなければならないことをあげた。

さらに、現在、非薬物療法には、認知症の人とその家族や支援をする人の QOL を高めるための、その人の個性にあった方法の発展が期待されているため、今後の研究において、非薬物療法によって、高められる QOL の要因は何であるのかを明らかにするためにも、次のことを本研究の目指す方向とした。それは、非薬物療法を個人の治療に留めるのではなく、そうした人々を包摂できる社会の形成に貢献できるものとして研究と実践に取り組むということである。

「いけばな街道」の研究と実践の成果をもってすれば、非薬物療法は病気の治療という側面だけを強調するものではなく、適用範囲を社会にまで広げることができる。対象者が社会で役割を果たし、それを楽しみながら効果がある療法として捉え、そこにおける「いけばな」の意義を認めることができた。こうした社会的な意義への認識が広がれば、「いけばな療法」のみならず、音楽であれ絵画であれ、他の非薬物療法の効果を考えるにも有益なものとなる。つまり、非薬物療法の基本的な方法の中にある「いけばな」のような本質的価値が、社会的な文脈の中で、その役割や意義を発揮することで、療法としての信頼性を高める方向が明確となることを示した。

そして、最後に、華道の長い歴史に「いけばな療法」が加わり、それにより、より良い社会が築かれることを目指し、今後も実践と研究に取り組むことを述べて本稿を締めくくった。(10,089 字)